『比較論理学研究』第 9 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2012)

『法華経』「方便品」における「初転法輪」

片山　由美

0. はじめに

『法華経』は、仏伝中の「梵天勧請」のエピソード（以下「梵天勧請」）にならい、シャーリプトラ（舎利弗）の釈尊に対する「三止三請」物語（以下「梵天勧請」）を創作する。「梵天勧請」は新たな法の開示となる「初転法輪」の契機として位置づけられるのに対し、「三止三請」は一仏乗法の開示となる「第二の転法輪」の契機として位置づけられるべきものである。『法華経』の作者達はこの「三止三請」を創作するために伝統的に受け入れられてきた「初転法輪」に新たな意味付けをしなければならなかった。『法華経』「方便品」第 110 偈から第 127 偈までは、仏伝中の「成道」、「梵天勧請」、「初転法輪」について語る。この中で「初転法輪」に関連するのは第 118 偈から第 127 偈である。本稿の目的は『法華経』「方便品」におけるこれらの偈頌を中心に取り上げ、『法華経』の作者達が新たに付与した「初転法輪」の意味を考察することである。

1.『大品』の「初転法輪」

『法華経』の作者達が知っていたと想定される、彼等の「初転法輪」の下敷きとなった原「初転法輪」の姿をパーリ律『大品』において確認しよう。

> Vin I.10.10–25: atha kho bhagavā pañcavaggiye bhikkhū āmantesi: dve 'me bhikkhave antā pabbajitena na sevitabbā. katame dve. yo cāyaṃ kāmesu kāmasukhallikānuyogo hīno gammo pothujjaniko anariyo anatthasaṃhito, yo cāyaṃ attakilamathānuyogo dukkho anariyo anatthasaṃhito, ete kho bhikkhave ubho ante anupagamma majjhimā paṭipadā tathāgatena abhisambuddhā cakkhukaraṇī ñāṇakaraṇī upasamāya abhiññāya sambodhāya nibbānaya saṃvattati. //17// katamā ca sā bhikkhave majjhimā paṭipadā tathāgatena abhisambuddhā cakkhukaraṇī ñāṇakaraṇī upasamāya abhīññāya sambodhāya nibbānāya saṃvattati / ayam eva ariyo aṭṭhaṅgiko maggo, seyyath' īdaṃ: sammāḍiṭṭhi sammāsaṅkappo sammāvācā sammākammanto sammāājivo sammāvāyāmo sammāsati. sammāsamādhi. ayaṃ kho sā bhikkhave majjhimā paṭipadā tathāgatena abhisambuddhā cakkhukaraṇī ñāṇakaraṇī upasamāya abhīññāya sambodhāya nibbanāya saṃvattati. //18//

「そこで世尊は五人の修行者の群れに告げた。「修行者らよ。出家者が実践してはならない二つの極端がある。その二つとは何であるか？ 一つはもろもの欲望において欲楽に耽ることであって、下劣・野卑で凡愚の行いであり、高尚ならず、ためにならぬものである。他の一つはみずから苦しめることであって、苦しみであり、高尚ならず、ためにならぬものである。真理の体現者はこの両極端に近づかないで、中道をさ

とったのである。(それは眼を生じ、認識を生じ、平安・超人知・正しい覚り・安らぎ(ニルヴァーナ)に向かうものである。修行僧らよ、真理の体現者のさとった中道—それは眼を生じ、認識を生じ、平安・超人知・正しい覚り・安らぎ(ニルヴァーナ)に向かうものであるが—とは何であるか?それは実に〈聖なる八支よりなる道〉である。すなわち、正しい見解、正しい思惟、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい念い、正しい瞑想である。これが実に、真理の体現者のさとった中道であり、眼を生じ、認識を生じ、平安・超人知・正しいさとり、安らぎ(ニルヴァーナ)に向かうものである」(翻訳は中村 [1969: 246–247] による)

先ず、「初転法輪」においてブッダは五比丘に、(1) 快楽主義と苦行主義の両極を離れた苦楽の「中道」(majjhamā paṭipadā)、(2) 中道によって「涅槃」(nibbāna) に導かれること、(3) その涅槃を獲得するための手段として「正見」(sammādiṭṭhi)、「正思」(sammāsaṅkappa)、「正語」(sammāvācā)、「正業」(sammākammanta)、「正命」(sammāājiva)、「正精進」(sammāvāyāma)、「正念」(sammāsati)、「正定」(sammāsamādhi) の「八聖道」(aṭṭhaṅgika-magga) があることを教示する。

さらにブッダは以下のように説く。

Vin I.10.26–38: idaṃ kho pana bhikkhave dukkhaṃ ariyasaccaṃ, jāti pi dukkhā, jarāpi dukkhā, vyādhi pi dukkhā, maraṇam pi dukkhaṃ, appiyehi sampayogo dukkho, piyehi vippayogo dukkho, yam p' icchaṃ na labhati tam pi dukkhaṃ, saṃkhittena pañc' upādānakkhandhāpi dukkhā. //19// idaṃ kho pana bhikkhave dukkhasamudayaṃ ariyasaccaṃ, yāyaṃ taṇhā ponobbhavikā nandirāgasahagatā tatratatrābhinandanī, seyyath' īdaṃ: kāmataṇhā bhavataṇhā vibhavataṇhā //20// idaṃ kho pana bhikkhave dukkhanirodhaṃ ariyasaccaṃ yo tassā yeva taṇhāya asesavirāganirodho cāgo paṭinissaggo mutti anālayo. //21// idaṃ kho pana bhikkhave dukkhanirodhagāminī paṭipadā ariyasaccaṃ, ayam eva ariyo aṭṭhaṅgiko maggo, seyyath' īdaṃ: sammādiṭṭhi... sammāsamādhi. //22//

「実に〈苦しみ〉という真理は次のごとくである。生れも苦しみであり、老いも苦しみであり、病いも苦しみであり、死も苦しみであり、〔憂い・悲しみ・苦痛・愁い・もだえもまた苦しみであり、〕憎い人に会うのも苦しみであり、愛する人に別れるのも苦しみであり、欲するものを得ないことも苦しみである。要約していうならば、五つの執着の素因としてのわだかまりは苦しみである。実に〈苦しみの生起の原因〉という聖なる真理は次のごとくである。それはすなわち、再生をもたらし、喜びと貪りをともない、ここかしこに歓喜を求めるこの妄執である。それはすなわち欲望に対する妄執と生存に対する妄執と生存の滅無に対する妄執とである。実に〈苦しみの止滅〉という聖なる真理は次のごとくである。それはすなわちその妄執の完全に離れ去った止滅であり、捨て去ることであり、放棄であり、解脱であり、こだわりのなくなることである。実に〈苦しみの止滅に至る道〉という聖なる真理は次のごとくである。これは実に聖なる八支より成る道である。すなわち、正しい見解、正しい思惟、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい念い、正しい瞑想である」(翻訳は中村 [1969: 247–248] による)

ここに、「初転法輪」において「苦諦」(dukkhaṃ ariyasaccam)、「集諦」(dukkhasamudayaṃ ariyasaccam)、「滅諦」(dukkhanirodhaṃ ariyasaccam)、「道諦」(dukkhanirodhagāminī paṭipadā ariyasaccam) の「四聖諦」が説かれることになる。『法華経』は、「声聞」を「自らの完全な涅槃のために (ātmaparinirvāṇahetoḥ) 四つの聖なる真理 (四聖諦) を覚ろうとして、如来の教誡に専心する」者とすることがここ

で想起されるべきである[1]。

1.1「知見」

ブッダは続けて次のように言う。

> Vin I.11.24–29: yato ca kho me bhikkhave imesu catusu ariyasaccesu evaṃ tiparivaṭṭaṃ dvādasākāraṃ yathābhūtaṃ ñāṇadassanaṃ suvisuddhaṃ ahosi, athāhaṃ bhikkhave sadevake loke samārake sabrahmake sassamaṇabrāhmaṇiyā pajāya sadeva-manussāya anuttaraṃ sammāsambodhiṃ abhisambuddho 'ti paccaññāsiṃ. //28// ñāṇañ ca pana me dassanaṃ udapādi: akuppā me cetovimutti, ayam antimā jāti n' atthi dāni punabbhavo 'ti.
>
> 「修行僧よ、これらの四つの聖なる真理に関してこのように三つの段階・十二のかたちある如実に見る知見がわたしにとってすっかり純粋清浄なものとして起こったのであるから、〈いまやわたしは神々・悪魔・梵天を含む世界、修行者・バラモン・神々・人間を含む生きとし生けるものどもの中において無上の正しい覚りを現にさとった〉と称したのである」「そしてわたしに次の知見が生じた。『わが心の解脱は不動である。これが最後の生存である。もはや後の再生はあり得ない』と。」世尊はこのように言われた。(翻訳は中村 [1969: 249–250] による)

ブッダに「四聖諦」に関して三転十二行相によって如実に見る「知見」(ñāṇadassana) が起こる。そして「四聖諦」に関する「知見」を得たブッダにさらなる「知見」が起こる。すなわち、「わが心の解脱は不動である。これが最後の生存である。もはや後の再生はあり得ない」という「知見」である。この「知見」は「私は涅槃を獲得した」という直観であり、『法華経』の作者が言う声聞乗の覚りである[2]。この声聞乗の覚りは声聞シャーリプトラが信じてきた覚りであり、『法華経』の作者達がブッダが方便として説いた覚りとするものである。

1.2「授記」

「わが心の解脱は不動である。これが最後の生存である。もはや後の再生はあり得ない」というブッダに生じた「知見」の言葉は、ブッダがもはや輪廻生存の世界に再生しないという予言の言葉(〈決まりのことば〉(veyyākaraṇa)、授記)である。

> Vin I.11.31–36: idaṃ avoca bhagavā, attamanā pañcavaggiyā bhikkhū bhagavato bhāsitaṃ abhinandanti. imasmiñ ca pana veyyākaraṇasmiṃ bhaññamāne āyasmato Koṇḍaññassa virajaṃ vītamalaṃ dhammacakkhuṃ udapādi yaṃ kiñci samudayadhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodhadhammanti. //29//
>
> 「一世尊はこのように言われた。五人の修行者の群れは歓喜し、世尊の説かれたことを喜んだ。そしてこの〈決まりのことば〉が述べられたときに、尊者コーンダンニャに、塵なく汚れなき真理を見る眼が生じた。—『およそ生起する性あるものは、すべて

[1]「譬喩品」において声聞乗について次のように述べられている。

> SP III.80.5–8: tatra kecit sattvāḥ paraghoṣa-śravānugamanam ākāṅkṣamāṇā ātmaparinirvāṇahetoś caturāryasatyānubodhāya tathāgataśāsane 'bhiyujyante / ta ucyante śrāvakayānam ākāṅkṣāṇās traidhātukān nirdhāvanti tadyathāpi nāma tasmād ādīptāgārād anyatre dārakā mṛgaratham ākāṅkṣamāṇā nirdhāvitāḥ /
>
> 「その場合、シャーリプトラよ、賢い部類に属する衆生たちは、世間の父である如来を信頼する。信頼を生じてから、さらに如来の教誡に専心し、努力を傾ける。そのうちで、他から教えられ、聞き学んで、それに従おうと欲するある種の衆生たちは、自らの完全な涅槃のために(ātmaparinirvāṇahetoḥ)四つの聖なる真理(四聖諦)を覚ろうとして、如来の教誡に専心する。彼らは、声聞の乗物(śrāvakayāna、声聞乗)を求めつつ三界から逃れ出るといわれる。それはたとえば、鹿の車(mṛgaratha)を求めている誰かある子供たちがかの燃えている家から逃れ出たようなものである」

声聞乗の者は、四聖諦を覚り自らの完全な涅槃を獲得する。

[2]本論 1.2. を見よ。

滅び去る性あるものである』と」(翻訳は中村 [1969: 250] による)

この「授記」によって、「四聖諦」という真理の提示、「四聖諦」の直観による涅槃の獲得、涅槃の獲得による輪廻の超克の教示という「初転法輪」の基本的骨格が示されたことになる。

1.3 六人の阿羅漢

『大品』の「初転法輪」は、以下の節でもって終わる。

> Vin I.14.31–37: Khīṇā jāti vusita brahmacariyaṃ kataṃ karaṇiyaṃ; nāparaṃ itthanttāya 'ti pajānātī"ti. idaṃ avoca bhagavā., attamanā pañcavaggiyā bhikkhū bhagavato bhāsitaṃ abhinandanti. imasmiñ ca pana veyyākaraṇasmiṃ bhaññamāne pañcavaggiyānaṃ bhikkhūnaṃ anupādāya āsavehi cittāni vimucciṃsu. tena kho pana samayena cha loke arahanto honti.
>
> 「「『生存はすでに尽きた。清らかな行いは修せられた。なすべきことはなされた。もはやこの世の生存を受けることはない』と確かに知るのである。」世尊はこのように説かれた。五人の修行僧の集いはこころ喜び、世尊の所説を喜んで受けた。そしてこの〈決まりのことば〉が述べられたときに、集うた五人の修行僧は執着なく、もろもろの煩悩から心が解脱した。そこでその時、世に六人の〈尊敬さるべき人〉がいることとなった」(翻訳は中村 [1969: 258–259] による)

執着なく煩悩から心解脱した五比丘もブッダと同じ〈尊敬さるべき人〉、つまり阿羅漢になった。『大品』における「初転法輪」が阿羅漢果の獲得とその獲得法に関する説法であることを明白に語っている。

2.「方便品」における「初転法輪」

「方便品」において「初転法輪」は第118偈をもって開始される。

> SP II.118: purimāṃś ca buddhān samanusmaranto upāyakauśalya yathā ca teṣām / yaṃ nūn ahaṃ pi ima buddhabodhiṃ tridhā vibhajyeha prakāśayeyam //118//
>
> 「過去の仏達を思い出して、彼らの巧みな方便は、どのようであったか思い出して、さあ私もまたこの仏の菩提を三種に分けて(vibhajya) ここに説き明かそう」

ここで注目すべきは、仏の菩提(buddhabodhi)の三種区分が巧みな方便とされる点である。『法華経』の作者達は、このように「初転法輪」を方便としての声聞乗と独覚乗と菩薩乗(大乗)という三乗の開示であると捉える。

2.1 三種区分の理由

仏の菩提が三種区分される理由は何か。

> SP II.121: vayaṃ pi buddhāya paraṃ tadā padaṃ tṛdhā ca kṛtvāna prakāśayāmaḥ /
>
> hīnādhimuktā hi avidvasū narā bhaviṣyathā buddha na śraddadheyuḥ //121//
>
> 「私達もまた最高の境地を覚ったその時、[仏の菩提を]三種に分けて説き明かしている。なぜなら、劣ったものを志向する無知な人間たちは『あなた方は仏になるでしょう』と言っても信じるはずはないからである (na śraddadheyuḥ)」

「あなた方は仏になるでしょう」という言葉は仏の菩提の内容が一切衆生皆成仏であることを示している。この仏の菩提そのものが言語化されたとしても、「劣ったものを志向する者」(hīnādhimukta) は信じないとされる。ここに仏の菩提が三種区分される理由がある。成仏を信じない者に成仏を覚らせるために方便が用いられる。その方便は当然成仏ではない目的を明示的に説くものでなければならない。

2.2 方便としての声聞乗

『法華経』の作者達は、方便としての声聞乗をどのように描いているのであろうか。

> SP II.125: tato hy ahaṃ śārisutā viditvā vārāṇasīṃ prasthitu tasmi kāle / tahi pañcakānāṃ pravadāmi bhikṣuṇāṃ dharmaṃ upāyena praśāntabhūmim //125//
>
> 「それゆえシャーリプトラよ、私は実に［このことを］知って、そのときヴァナーラシーに出発した。そこで私は五人の比丘に寂静の境地である法を方便を用いて説くのである」

この偈頌は、ブッダが五比丘に説く寂静の境地(praśāntabhūmi) の教えが方便であることを語る。言うまでもなく「寂静の境地」とは、輪廻の苦の終息、「涅槃」(煩悩の滅) のことである。このことは、次の第 127 偈に次のように述べられている。

> SP II.127: bhāṣāmi varṣāṇi analpakāni nirvāṇabhūmiṃ c upadarśayāmi / saṃsāraduḥkhasya ca eṣa anto evaṃ vadāmī ahu nityakālam // 127//
>
> 「長い間、私は涅槃の境地 (nirvāṇabhūmi) ［である法］を語りそして示し、『これ (法) が輪廻の苦しみを終わらすものである』ことを、私は常にこのように語っている」

重要なことは、『法華経』においてこの「涅槃」は真の意味での涅槃ではないことである。「譬喩品」第 98 偈はこの点を次のように述べている。

> SP III.98: evaṃ ca ham tatra vadāmi nirvṛtim anirvṛtā yūya tathaiva cādya / saṃsāraduḥkhād iha yūya muktā bauddhaṃ tu yānaṃ va gaveṣitavyam //98//
>
> 「このようにして、私はそれ (仏乗) における涅槃を説いた。しかし、(仏乗にあるのと) 全く同様の涅槃をあなたたちはまだ得ていない。この世で輪廻の苦しみから解放されたにすぎない。実にいまや仏陀の乗り物をこそ求めるべきである」

仏乗における涅槃は、「個別的な完全な涅槃」(pratyātmikaparinirvāṇa) と言われる輪廻からの解放を意味する涅槃と区別され、「如来の完全な涅槃」(tathāgataparinirvāṇa)、「偉大なる完全な涅槃」(mahāparinirvāṇa) と言われる[3]。『法華経』は、個別的な涅槃を獲得していても、仏乗における「涅槃」に達していないものを「涅槃を得ていないもの」(anirvṛta) と呼ぶ。

2.3「三宝」

『法華経』の「初転法輪」は、先に取り上げた第 127 偈をもって終わる。先行する第 126 偈では次のように語られている。

> SP II.126: tataḥ pravṛttaḥ mama dharmacakraṃ nirvāṇaśabdaś ca abhūṣi loke / arhantaśabdas tatha dharmaśabdaḥ saṃghasya śabdaś ca abhūṣi tatra //126//
>
> 「このようにして私の法の輪が回転し始めた。そして『涅槃』(nirvāṇa) という言葉がこの世に現れた。同様に『阿羅漢』(arhat) という言葉、『法』(dharma) という言葉、『僧団』(saṃgha) という言葉がここに現れた」

「初転法輪」が、「涅槃」、「阿羅漢」、「法」、「僧」という言葉による仏の菩提の開示であることが

---

[3]「偉大なる完全な涅槃」(mahāparinirvāṇa) と「個別的な完全な涅槃」(pratyātmikaparinirvāṇa) については「譬喩品」で次のように語られている。

> SP III.31.11–13: śāriputra tasmin samaye tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddhaḥ prabhūto mahājñānabalavaiśāradyakośa iti viditvā sarve caite mamaiva putrā iti jñātvā buddhayānenaiva tān sattvān parinirvāpayati / na ca kasyacit sattvasya pratyātmikaṃ parinirvāṇaṃ vadati /sarvāṃś ca tān sattvāṃs tathāgataparinirvāṇena mahāparinirvāṇena parinirvāpayati /「シャーリプトラよ。そのとき正しい覚りを得た尊敬に値する如来は、自分が大いなる智慧の力と畏れなき自信の大きな蔵であることを知り、また、まさにここなる彼らが私の息子であると知って、仏の乗物だけで彼等衆生を完全な涅槃に導くのである。しかし、どんな衆生に対しても個別的な (pratyātmika) 完全な涅槃があると説くのではない。彼等一切衆生を、如来の完全な涅槃、すなわち偉大なる完全な涅槃を目的として (完全な涅槃に導き) 完全な涅槃にはいらせるのである」

述べられている。ここにおける「涅槃」が指し示すものは「阿羅漢」となって獲得される涅槃(個別的な涅槃)であり、当該偈頌は声聞乗が仏の菩提を説示する方便であることを如実に語っている。言うまでもなく仏教の「三宝」は「仏・法・僧」である。

2.4 仏の菩提

仏の菩提が方便として三種に区分されたとき、声聞は声聞乗を仏の菩提の獲得を本質とするものと理解したはずである。「初転法輪」において仏の菩提の聞法者の理解と釈迦牟尼ブッダの説法の意図との齟齬が必然的に生じたことを『法華経』の作者達は描かざるを得ない。『法華経』の作者達は、「初転法輪」において聞法者が理解した仏の菩提に対して、釈迦牟尼ブッダが意図した仏の菩提を以下に述べるように区別する。

> SP II.128–130: yasmiṃś ca kāle ahu śāriputra paśyāmi putrān dvipadottamānām / ye prasthitā uttamam agrabodhiṃ koṭīsahasrāṇi analpakāni //128//
> upasaṃkramitvā ca mamaiva antike kṛtāñjalīḥ sarvi sthitāḥ sagauravāḥ / yehī śruto dharma jināna āsīt upāyakauśalya bahuprakāram // 129//
> tato mamā etad abhūṣi tatkṣaṇaṃ samayo mamā bhāṣitum agradharmam / yasyāham arthaṃ iha loki jātaḥ prakāśayāmī tam ihāgrabodhim //130//
>
> 「シャーリプトラよ、そしてその時私は、両足ある方の中の最高者(仏陀)達の息子達を見る。彼らは、最も勝れた最高の菩提(uttama-agrabodhi)を獲得するため前進しており、[その数は]幾千万億もの多数である。そして彼らはまさに私のそばに近付いて、皆敬意をもって合掌し立っていた。彼らは勝利者たちの多種多様な巧みな方便のお陰で法に耳を傾けていた。それゆえ、私はその瞬間に次のことを考えた。『私の最高の法(agradharma)を説くべき時である。そのために私はこの世に出現したのである。ここでこの最高の菩提(agrabodhi)を説き明かそう』」

「勝れた最高の菩提」(uttama-agrabodhi)[4]や「最高の菩提」(agrabodhi)や「最高の法」(agradharma)という表現が使用されている。『法華経』の作者達が、仏教の伝統において確立されていた「仏の菩提」や「法」に対置するためにこれらの表現を使用していることは明らかであろう。

以下の「方便品」の偈頌は、「最高の菩提」が三種に区分された仏の菩提であることを明確に語る。

> SP II.104–105: daśasū diśāsū naradevapūjitās tiṣṭhanti buddhā yatha gaṅgavālikāḥ / sukhāpanārthaṃ iha sarvaprāṇināṃ te cāpi bhāṣant imam agrabodhim //104//
> upāyakauśalya prakāśayanti vividhāni yānāny upadarśayanti / ekaṃ ca yānaṃ paridīpayanti buddhā imām uttamaśāntabhūmim //105//
>
> 「十方世界において、人と神によって供養され、ガンジス河の砂のように無数の仏が留まっていらっしゃる。この世界において、すべての命あるものを安楽にさせるために、彼等もまたこの最高の菩提(agrabodhiṃ)を説くのである。仏たちは、方便の巧さ(upāyakauśalya)を[全面的に]説き明かす(prakāśa)つまり、種々の乗物を[二次的に、多様に]示す(upadarśa)。また同時に、この唯一の乗物(ekayāna)こそが最高の寂静の境地(ut-

[4]「譬喩品」にも「勝れた最高の菩提」(uttama-agrabodhi)という表現が見られる。

> SP III.104: kiṃ kāraṇaṃ nāsya vadāmi mokṣam aprāpt imām uttamam agrabodhim / mamaiṣa chando ahu dharmarājā sukhāpanārthāyiha loki jātaḥ //104// 「なぜ解脱があると彼に説かないのであろうか。なぜなら、最高のすぐれた菩提を獲得していないからである。だから、ここに私の望み(衆生に菩提の獲得に向けて意欲を起こせという)がおこるのである。なぜなら、わたしは[一切衆生を]安楽にするために法王としてこの世に生まれ出たのであるからである」

tamaśāntabhūmi=agrabodhi）であることを［完全に］説明するのである(paridīpayanti)」

ここでは、三乗の方便化によって説示された仏の菩提を「最高の菩提」と表現することによって「初転法輪」の価値の転換が図られている。

3. 結論

一乗思想を表明しようとする『法華経』の作者達にとって、現前に存在する三乗の教えは仏説であった。そして彼等は一仏乗法も仏説として位置づけなければならなかった。このために彼等は、ブッダは仏の菩提を三種に区分し、三乗を方便として説いたとする「初転法輪」を創作しなければならなかった。

『法華経』の作者達は、伝統的に確立されていた「仏の菩提」を一乗思想の枠組みの中で「最高の菩提」と表現することによって「初転法輪」の価値の転換を図っている。

略号と参考文献

SP: *Saddharmapuṇḍarīka*. H. Kern and B. Nanjo, eds., Bibliotheca Buddhica, No.10, 1908-1912.
KN: Kern and Nanjo eds. See SP.
Vin: *Vinayapiṭaka* Vol. 1. The Mahāvagga. Hermann Oldenberg, ed., Oxford: The Pali Text Society, 1997.
Vin.A: *Samantapāsādikā: Buddhaghosa's Comentary on the Vinaya Piṭaka*, Vol. 5, J. Takakusu and M. Nagai, eds., London: Pali Text Society, 1966.
WT: Wogihara and Tsuchida, eds., *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*, Tokyo, 1934.（荻原・土田改訂梵文法華経, 大正大学聖語研究会発行）
Horner, I.B.(tr.)
1971 Book of Disciplines. Vol. 4. London: Pali Text Society.
Kern, Hendrik (tr.)
1965 *Saddharmapuṇḍarīka or the Lotus of the True Law*, Sacred Books of the East Vol. 21, Delhi: Motilal Banarasidass.
片山由美
2011 『法華経』における「三止三請」と『大品』における「梵天勧請」 —三乗から一仏乗への転換—『比較論理学研究』8: 255－ 262.
中村元
1969 『ゴータマ・ブッダ—釈尊の生涯ー原始仏教 I』春秋社

（かたやま　ゆみ、広島大学［インド哲学］）